

# 父を語る

小豆澤 愛美子

私の父 榎本玄乗は 1890 年（明治 23 年）の生まれです。

父は長男でありませんでしたので、家業の医院を継ぐことができませんでした。

天王寺中学を卒業してから 何をしていたか わかりませんが、祖母方の伯父がアメリカへ行っていまして、来ないかといわれ、行って 20 年以上住んだと聞きました。

母が亡くならなかったら、ずっと戦争になってからも アメリカにいたと思います。伯父の親族は収容所にも入り、アメリカ軍として参戦していたようです。

父は、アメリカの話は戦時中でもありましたし、何も話しませんでした。

このことは親類の人から聞いた話を  
つなげたものです。



私と妹を連れたアメリカからの帰途は  
長い船旅だったようです。横浜港に着き

ました。シアトルの家の記憶は一つもありませんが、日本の家に入る時、門から玄関までの道を歩いたとき、雪が降っていて両側に木があったのが目の底に残っています。それはそこが「今度の愛美子の家よ」と云われたので、注意したのではないかと思います。

その家には、小学 4 年の夏に縁故疎開をするまで住みました。

家には、アメリカから持って帰った アンモニアと電気で冷える白い冷蔵庫 電気で動く掃除機、電気の家庭用のオ-ブンなどがありました。

戦争も後半になったころ、ベットの金具とか、鍋釜まで供出というのがあって、出してきました。

国力のちがう国との戦争を 日本の状態をどんな思いで見ていたのか、私は小学生で何も分かりませんでした 父の年を越えるようになって考えさせられます。

私が 20 歳になったとき

「私の出生証明

父母の結婚証明書

母のシアトル病院で妹の出産と母の死亡

日本入国時の大蔵省為替局の書類」

米国籍を申請するのに必要そうな書類が用意されていて、渡されましたが、私は小学校の頃の教育が身にしみ込んでいて、鬼畜米英の思想が抜けていなくて いらないと云ったように思います。

父は一度しか云わなかったように思います。だから私の心の中にはのこっていません。

書類は きちんと揃えられてのこっていました。

いつかアメリカに子供達をつれて帰りたかったのでしょうか。……

# “わが父を語る”

石原靖造

愛知県中島郡（今の稲沢市）、の中心辺りの農村部落、ここが父の生地であり、私のルーツでもあります。織田信長の生地とされる勝幡城はごく近くで、西の方角に鈴鹿山脈、その遥か向こうに伊吹山が望める豊かな田園地帯です。



祖先は平家の落ち武者と聞かされていますが、確たる証は何もありません。

明治 40 年農家の三男・二女の末っ子で生まれた父は、小学校卒業と同時に大阪の三品取引所の仲買人である商家に丁稚奉公に出されました。昼は綿花、綿糸、綿布の注文取りに飛び回り、夜は読み、書き、ソロバンと一人前の商売人になる為に大変苦勞した様です。店主には可愛がられていた様で、この店主の世話で昭和 8 年母と結婚、私を筆頭に男児ばかり 5 人に恵まれましたが、一番下は惜しくも 3 歳で亡くなりました。後の四人は今尚健在です。

昭和 18 年戦火が激しくなる中、一家は大阪から父の在所に疎開、身体が弱く兵役を免れた父は近くの軍需工場で働き終戦を迎えました。

戦後はいち早く以前の仲間と大阪で繊維問屋を立ち上げ、商売も順調に伸びて、一家は再び大阪へ舞い戻りました。

自らを丁稚からの叩き上げと自任しただけあって、それなりの信条は持ち合わせていた様で、例えば、物は言い値で買うものではないとばかり、無駄と分かっているにもかかわらず百貨店で値切ったりしていました。又、家族でよく会食に出掛けましたが、ご馳走は一切けちる事はありませんでした。食べた物は全部自分の身に付くから損はしてないという訳です。

当時大阪の商家の子息達は皆大阪商大(現在の大阪市大商・経学部)を目指していた様です。ですから口を開けば“商大へ行け、商大へ行け”そして“学のある商売人になれ”とよく聞かされていまして、私が市大の経済に入った事を大層喜んで呉れました。一つ親孝行したかなと思った程でした。

でも父の言った“学のある商売人”とは如何いう事を指すのか？その後私は商社に入り色々と商売を経験させて貰いましたが、未だにこの宿題は良く解っていません。

父は商売がら相場を張る事には抵抗なかった様で、株取引には熱心でした。ギャンブルも好

きだった様で、よく双眼鏡をさげて競馬場へ出掛けていました。

私が未だに株や馬券に手を出しているのは、この血を引き継いだからかも知れません。



私がオーストリアのメルボルンに駐在時の昭和 45 年、両親を一か月間呼び寄せました。飛行機に乗るのも、外国へ行くのも初めての二人は大いに感激して呉れた事、今でも懐かしく思い出されます。

父の晩年は身体が腺病質だった事もあり、母の介護を受け続け 76 歳が最期でした。戦時を挟んだ人生の前半は苦労が多かったでしょうが、四人の息子が無事育った後半はそれなりに充実していましたので、押し並べて悔いのない人生だっただろうと思っています。

令和 3 年 5 月 21 日

(完)